



Title	新渡戸稲造の朝鮮（韓国）観
Author(s)	田中, 慎一; TANAKA, Shin'ichi
Citation	経済學研究, 54(4), 9-18
Issue Date	2005-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/6030
Type	departmental bulletin paper
File Information	54(4)_p9-18.pdf



新渡戸稲造の朝鮮(韓国)観

田 中 愼 一

はじめに

かつての我が国の高等教育機関(大学のみならず旧制専門学校¹⁾)を含む。このように旧制専門学校を大学レベルの高等教育機関とするのは至当な処置であろう²⁾の幾つかには授業科目として植民学、もしくはそれに類するもの³⁾があった。

このような植民学が戦前昭和期に各高等教育機関でどのように開講されていたのかを一瞥するために作成したのが表1である。主要な大学および旧制専門学校で植民学が必置科目のようになっていたことがわかる。日本の植民地領有国家としての側面に対する高等教育機関としての即応形態である。植民地領有は当時の国家当為の所産であったから、国家的要請を受けざるをえない植民学には社会的期待も寄せられていたのであろう。

したがって、授業科目としての植民学は当然視されていた。植民学の講壇に疑問が呈されることは多分なかったであろうが、長期

継続的な一学問領域として植民学が成立しうることに当初から懐疑的だったのは新渡戸稲造(1862~1933)である。

新渡戸稲造は我が国の帝国大学で最初の植民学担当者であった。その新渡戸が植民学の学問としての成立根拠に疑問を呈していたのだから皮肉である。それはともかくとして、植民地を研究対象とせざるをえなくなった新渡戸がより身近な日本植民地、より具体的には朝鮮(韓国⁴⁾)をどのように観察していたのか、その跡を辿ってみるのが本稿の直接的目的である。なお、行論の関連から主に註で多少とも横道に入ることもあろう。

1. 1880年代頃の朝鮮観

日本の立場を、朝鮮半島・中国大陸との関連といった東アジア国際環境のなかで、説明しようとする時、その説明をわかりやすく理解して

- 1) 天野郁夫『旧制専門学校』(日経新書, 1978年)参照。本書はこれまでの我が国の高等教育の歴史を、旧制高等学校=帝国大学を中心に書いてきた帝国大学史観ではなく、旧制専門学校史観の視点から見直すことで、我が国の高等教育の原点としての旧制専門学校が日本の近代化ではたした役割をさぐりあてようとしたものである。(9頁)
- 2) かつての日本の帝国大学がヨーロッパ的な大学であったとすれば、旧制専門学校はそれと対照的な日本の大学であったから、旧制専門学校は我が国の大学のルーツであるとされている。(同上書, 201頁)

- 3) 植民学・植民論・植民政策・植民政策学・植民政策論などであり、しかもその「植」が「殖」となっていることもある。殖民学・殖民論のように。したがって、本稿で植民学と書く場合、これらの総称としての意味で用いている。
- 4) 1897年の国号「大韓帝国」成立以後はこの略称としての韓国になるが、それ以前は1393年に国号を朝鮮と定めた(李氏朝鮮・李朝[李氏王朝の略称]とも称した)。1910年8月22日の韓国併合条約を経て同年8月29日に国号を朝鮮と改め朝鮮総督府が統治する朝鮮であるというようになったが、1945年8月15日の解放以後、半島の南は「大韓民国」(1948年8月15日樹立、これも略称で韓国)となり、北は「朝鮮民主主義人民共和国」(1948年9月9日樹立、略称北朝鮮)となって分裂国家となった。(武田幸男編『朝鮮史』山川出版社, 1985年, 「年表」参照)

表1 高等教育機関の<植民学> (1940年代)

学校名	授業科目名	時間数	担当者
東京帝国大学	植民政策	週2時間	東畑精一
京都帝国大学	植民政策	週2時間	八木芳之助
東北帝国大学	植民政策論		上原轍三郎
北海道帝国大学	植民学	二学期間週2時間	
	植民史	一学期間週1時間	上原轍三郎
	植民特別講義	一学期間週1時間	
	植民学演習	四学期週1回	
東京商科大学	植民政策	週2時間	板垣與一
神戸商業大学	植民政策	週2時間	金田近二
	東洋経済事情	週2時間	
大阪商科大学高商部	植民政策	週2時間	浅香末起
東京文理科大学			(大亜細亞教育連盟)
広島文理科大学			(東亜研究会)
慶応義塾大学	植民政策		加田哲二
		週6時間	嶺智雄
	東亜経済事情		及川恒忠
早稲田大学	東亜経済	週1時間 学部	嘉治隆一
			専門部
立教大学	植民政策	週2時間	福田光三
農業大学(専門部)	植民史及植民政策		稲田昌植
	海外事情	一学期間週2時間	半沢耕貫
	開拓地経営		浅川其二
関西大学	植民政策	週2時間	中村良之助
中央大学	植民政策	週2時間	柳沢慎之助
			山崎馨一
			川原次吉郎
盛岡高等農林学校	植民政策	週1時間	堀内政一
鹿児島高等農林学校	植民論	週1時間	吉田安喜雄
宮崎高等農林学校	植民論	週2時間(半ヶ年)	沢田収二郎
三重高等農林学校	植民政策	週2時間	
	満支事情	週1時間	郷原保
岐阜高等農林学校	植民政策	週2時間	井上陽之助
	植民地事情	週2時間	稲田昌植
宇都宮高等農林学校	植民政策	週1時間	大橋與一
	海外事情	週1時間	
鳥取高等農林学校	植民政策	週2時間	若木子礼
	東亜農業論	週2時間	金子平一
上田蚕糸専門学校	植民論	年約10時間	稲田昌植
千葉高等園芸学校	植民論	週1時間	石川武彦
東京高等蚕糸学校	植民講話		永田
彦根高等商業学校	植民政策	二学期間週2時間	田中秀作
	海外経済事情	一学期間週2時間	
高岡高等商業学校	経済地理	半ヶ年週3時間	
	植民政策	半ヶ年週2時間	小寺廉吉
	東亜事情	半ヶ年週3時間	佐原・細野
			杉田・中村
山口高等商業学校	海外事情		亀井
	拓殖論	本科週1時間	日柳彦九郎
		研究科週2時間	
大分高等商業学校	移植民論	週2時間	森徳文三郎
横浜高等商業学校	移植民論	週1時間	増栄太郎
高松高等商業学校	植民政策	一学期間2時間	丸寺水作
	東亜経済事情		寺田貞次
	支那事情	二学期間2時間	岩井茂
名古屋高等商業学校	農業及植民政策	週2時間	穴田秀男
和歌山高等商業学校	植民政策	週2時間	金持一郎
福島高等商業学校	植民政策		小林昇

出典：『拓殖論叢』第3巻第1号(財団法人日本拓殖協会，1941年7月)235-237頁の「大学専門学校植民講義及研究団体一覧」による。
ただし、福島高商は小林昇『掃蕩兵の散歩』(未來社，1984年)121・150頁による。

備考：東京文理と広島文理の担当者欄は学生団体名である。

もらおうと新渡戸稲造が用いた方法は、日本の立場をイギリスに置き換え、イギリスの立場をヨーロッパ大陸との関連で説明することだった。それを<日英比較論法>と名づけておこう。この<日英比較論法>は英文『日米関係史』⁵⁾

に早くも用いられる。そして、新渡戸の幾つもある英文著作のうち最初のものであった本書に、朝鮮の事が出てくる。『日米関係史』はペリー来航前後から本格化していくアメリカ合衆国と日本との交渉の経緯に関する歴史研究である。

5) Inazo (Ota) Nitobe, *The Intercourse between the United States and Japan, an Historical Sketch* (Baltimore, 1891). 新渡戸が1884～87年に留学したジョンズ・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) へ提出した学位論文で、これにより1890年6月12日に「名誉バチェロル・オブ・アーツ学位」(名誉文学士)を授与されたと理解されてきたものである。(['新渡戸稲造全集』第17巻, 教文館, 1985年, 松下菊人「解説」, 参照) なお、『新渡戸稲造全集』は教文館から1969～70年に第1～16巻が刊行され、これが第1期とされて、1985～87年に第2期として第17～23巻と別巻が刊行された。本稿では以下、全集と略す。後述のように、こうした従来の理解は不正確なものである。ともかく、この新渡戸論文は1891年に同大学出版部 (The Johns Hopkins Press) からハーバート・バクスター・アダムス (Herbert Baxter Adams 1850～1901. アマースト大学卒業後ハイデルベルク大学に留学し1876年帰国後ジョンズ・ホプキンス大学に最期まで奉職) を編者とする同大学歴史政治学研究叢書 (Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science) の一冊として出版され単行本となった。(全集第13巻, 初版1970年, 再版1984年, 「解説」。全集第22巻, 1986年, 佐藤全弘「解説 ハーバート・B・アダムス宛書簡」参照) 本書は全集第13巻, 所収。松下菊人訳が全集第17巻にある。ところで、新渡戸は米国留学で学位取得をめざしたのに、なぜ当初目的とした博士号ではなく、文学士なのであろうか。その間の事情を若干述べる。

1881年7月札幌農学校卒業(第2期生)の農学士新渡戸は開拓使御用掛(1882年2月開拓使廃止)・農商務省御用掛(1883年8月辞職)を経て、1883年9月東京大学に選科生として入学するが1884年8月に退学し、米国船サンバプロ号に乗って9月に渡米、当初ハリス師夫人の出身校アレガニー大学(ペンシルヴァニア州ミードヴィル)に2週間ほどいたが、一足先に入学していた佐藤昌介(札幌農学校1880年卒業の第1期生)のついでで同じジョンズ・ホプキンス大学(メアリーランド州ボルティモア)に1876年、大学院大学として開校。ドイツ流の大学院教育、ゼミナール方式をとり入れ、当時学術的に最高水準にあったという)の歴史学

部大学院生として10月17日に登録手続きを済ませ、以後、主に「歴史政治セミナー」でH. B. アダムス(当時準教授)の指導を受けた。(古谷 旬「ボルティモアの新渡戸稲造」全集第20巻, 1985年, 付録「月報」20)

アダムスの切なる勧告によって日米関係史を調べるようになったが、自費留学(叔父で養父の太田時敏と長兄七郎に依存)で経済的に余裕がなく(佐藤やアダムスの援助もおおく)研究時間の確保もままならなかったこともあり、博士号取得のための博士論文が完成しないまま2年以上たつたなか苦境に陥っていた。進退窮まっていたらしい新渡戸の苦衷を察したのが、すでにジョンズ・ホプキンス大学からドクトル・オブ・フィロソフィーを授与され帰国して札幌農学校教授になっていた佐藤で、この先輩の助力で1887年3月3日に滞米中のまま札幌農学校助教(今の助手に相当か)に採用され北海道庁の官費留学生となってドイツに3カ年派遣されることになる。新渡戸は「プロイセンの大学で文学修士と哲学博士の取得に成功した」(So then I have succeeded in obtaining A. M. Ph.D. in a Prussian University.)が、さらにアダムス博士へジョンズ・ホプキンス大学が新渡戸に名誉文学士もしくは格別文学士の学位を授与してくれるよう問い合わせていた(In connection with academic degrees, I wish to ask you, Dr. Adams, whether the J.H.U. won't give me A.B. honorarius or extraordinarius.) (1890年5月15日付, Halle滞在中の新渡戸からアダムス宛書簡。全集第23巻, 1987年, 所収, 490頁)。

すでにドイツで文学修士号と哲学博士号を取得しているのに、さらに米国で学位を取得しようとするには無理があることを感じながらも新渡戸にはそうせざるをえない事情があった。約3カ年の米国留学の成果を学位という可視的しるし(visible mark)によって親族に示す必要、また2カ年の交際を経て婚約したばかりの(I have taken this decisive step after two years of thought and prayer and I hope it will lead to make me more service able to my God, Country and Science.) 米国人女性メリー・エルキントン(an American lady, Mary P. Elkinton of Philadelphia. 同上, 491 - 492頁)およびその実家との関係を円満なものにするた

けれども、当然というべきか、アメリカ以外の諸外国と日本との交渉史も論じている。そうした諸外国のうち最初に取り上げているのが朝鮮である。その朝鮮と日本との交渉史を西暦紀元前2世紀から1880年代前半まで素描している。そのなかで、日本が朝鮮半島に勢力を扶植しようといういろいろ要求をもったのはイギリスがフランスにしたことと似ている、という見方を示している。西ではイギリスの、東では日本の、至近の対岸の大陸に対するこの種の要求が両国間の紛争の源泉だという比較論法である。それぞ

れユーラシア大陸の東端と西端に位置する対蹠的な島国の日本とイギリスから大陸を望まんとすれば、朝鮮とフランスはそれぞれ似たような存在になってきていたという、いわば朝鮮・フランス比定法>である。すなわち、英国諸王のフランスに対する要求と似て、旧来から絶え間ない紛争の源泉となっていた、日本の朝鮮に対する要求がようやく終結したのは1876年2月調印の、朝鮮の独立主権を認めた日朝修好条規によってであったと見なす新渡戸は、同条規が1854年の日米和親条約の反復であるとし、黒田

めにも必要とされたふしがある。学位授与を依頼されたアダムスは1890年6月13日付の新渡戸宛書簡(favor)で新渡戸に格別文学士の学位(the degree of A.B. extraordinem)授与を知らせた。(1890年7月2日付、Muncy滞在中の新渡戸からアダムス宛書簡。同上、493頁)1882年にジョンズ・ホプキンス大学歴史政治学研究叢書を作って編者となっていたアダムスがさらに新渡戸宛の手紙(letter)で同叢書の別巻(extra volume。同上、494頁)として出版してはどうかと示唆(suggestion)したのに対し、それを歓迎した新渡戸はアダムスから送り返してもらった論文を英語力が秀でているエルキントン嬢による修正や提言の大いなる助力に支えられながら共同で刊行用の全体的な手直し作業に入りながら(Since receiving your letter, I am going thro' the whole work with Miss Elkinton, who is an excellent English scholar and who helps me greatly by making corrections and suggestions.),アダムスに対し自分の作品が出版に値するかどうかその判断をしてくれればよいかと返事している。(1890年8月18日付、Overbrook滞在中の新渡戸からアダムス宛書簡。全集第23巻、494頁)おそらくO.K.と知らせたであろうアダムスは費用として444ドル(出版費用の全部か一部かはっきりしないが)を立て替えてやってまでして新渡戸論文出版の労をとったのである。新渡戸の恩師ともいべき人物である。(全集第22巻、前掲佐藤全弘「解説」674-678頁、参照)

以上から、ドイツで修士号と博士号を取得した新渡戸が元の米国留学先のJ.H.大学に改めて望んだ学位は名誉文学士もしくは格別文学士(extraordinariusやextraordinemの訳語だが、格外や特別と訳せもするだろうが、格が違って格からはずれて劣る格下のとか、特別に文学士をあたえてやったとか誤解されかねないために、学士の標準を越える別格という意

味に通じる格別という訳語を当てておいた)であり、結果的には名誉文学士とならず格別文学士となった。おそらく、単に名誉のために形式的にあたる文学士ではなく、破格の優れた水準の論文にふさわしいものとして後者になったのではあるまいか。しかし、その日本語表記に苦慮したに違いない新渡戸は名誉の高い別格の文学士との含みを持たせてもいたであろう、名誉文学士で通していたようである。例えば、札幌農学校学芸会編『札幌農学校』(裳華房、1898年)には「農政学、農史」担当教授新渡戸稲造の肩書が「マキステル、アルチウム及ドクトル、フィロソフヒエ(独国ハレ大学)/(名誉)パチエロル、オブ、アーツ(米国ゲヨンス、ホツプキンス大学)/農学士」とある(68頁)。札幌農学校入学以来とりわけ歴史と英文学を好んでいた新渡戸、彼にとって第二の母語の地ともいべき米国内で文学士はどうしても手に入れておきたい学位であったに違はなく、見事にそれを実現したわけである。なお、歴史に関心の深かった新渡戸(1892年4月9日札幌農学校学芸会会頭、1893年5月3日札幌史学会会頭)は奉職した札幌農学校で何らかの歴史の講義をしたかったのであろう、北海道庁所轄になってから一層いわゆる実学に傾斜しつつあった母校(1882年2月8日開拓使が廃止され函館・札幌・根室の三県設置、3月8日農商務省所轄、7月農商務省農務局所轄、1883年1月29日農商務省に北海道事業管理局設置、2月農商務省北海道事業管理局所轄、1886年1月26日三県・北海道事業管理局が廃され北海道庁設置、北海道庁所轄、1890年7月7日北海道庁は内務省管轄。1895年4月1日文部省直轄学校となる)の授業科目に敢えて「農史」を設けたのは新渡戸であろう。その成果は『農業発達史』(大日本実業学会、1898年、全集第2巻、1969年、所収)となって現われる。

清隆をペリー提督に擬し、アメリカが日本を開国させたように日本は朝鮮を開国したのであり、同条規が朝鮮開国条約となり、1882年調印の米朝修好通商条約の先鞭をつけたことにより、日本がアメリカと朝鮮との間の媒介者の役割をした、と見なしている。そして、1854年の日本と1876年の朝鮮をいずれも開国過程にあつて国家的な再生をはかつていく起点であると見なす新

渡戸は、1882年7月の壬午事変が保守的な朝鮮暴徒による在留日本人虐殺(massacre⁶⁾)であつたにもかかわらず賠償金問題⁷⁾で日本は比較的寛容であり、かなりの朝鮮青年が日本に留学してきたことに注目している。日本で幕末開港後に起きた攘夷運動およびその賠償金問題、日本青年の洋行と対比できる例が朝鮮でも同様に起きているという観察である。朝鮮に対して

- 6) 日本公使館関係者のうち13名が殺害(田保橋潔『近代日鮮関係の研究』上巻[朝鮮総督府中枢院, 1940年]では「壬午兵変」「漢城兵変」と称されたこの大事件の善後条約である1882年8月30日済物浦仮館で調印の済物浦条約の表現では「日本官胥遭害者」とある)されたことは1882年9月3日に済物浦での日本人13名の葬儀に朝鮮政府からも参列している(済物浦条約「第二 日本官胥遭害者, 由朝鮮國優礼遷葬, 以厚其終事。」にもとづく)ことからわかり、また朝鮮政府がこの日本人死者遺族ならびに負傷者に扶助料として総額銀50,000円を支給すると約した(済物浦条約「第三 朝鮮國撥支五万円, 給与日本官胥遭害者遺族並負傷者, 以加體卹事。」)ことからわかる。(同上書, 770・819・820・823・825頁)なお, 同上書の一節に「一隊[樺米問題の騷擾から王妃殺害未遂すら含み「大逆不道罪人」を幾人もだす政治的反乱を起こした首都の朝鮮軍卒]は乱民と合して日本国公使館を襲撃し, 公使以下全員を逐ひ, 途上遭遇せる日本人を盡く虐殺した」(773頁)とある。
- 7) 新渡戸は\$ 550,000と書いている。これは扶助料銀50,000円と損害賠償・軍費賠償金銀500,000円(済物浦条約「第四 因兇徒暴挙, 日本國所受損害, 及護衛公使水陸兵費内五十万円, 由朝鮮國填補事。毎年撥支拾万円。待五個年清完。」)同上書, 820-821頁)の合計をドル表示したものであろう。当時, 円とドルの公定為替相場は1円=1ドル。因みに, 明治8年改正貿易銀(1円銀貨)と1873年アメリカ貿易ドル(1ドル銀貨)は, 重量420 grains (1grain=0.0648グラムで約27.2グラム), 品位900 fine (純銀含有率900/1000), 純銀含有378 grains (約24.5グラム)で, 全く同量同質であつた。これを支払うために朝鮮政府は1882年12月18日, 横浜正金銀行を債権者とし契約金額日本紙幣170,000円を年利率8%(償還期限12年, うち5年据え置き)で借入れ, 釜山税関収入または咸鏡南道端川鉾山合同採掘権を担保とする(返済遅延のばあい, 同行代理人が釜山税関を監督し税関収入から元利金分を天引きするか, あるいは端川鉾山に同行から人を派遣して金塊・砂

金を元利金に充当する)借款契約を締結した。この横浜正金銀行借款は日本の国庫金が年利率4%で横浜正金銀行に貸出されたものが同行を債権者として朝鮮政府に貸付けられたもので(利子のうち同行の受け取り分は1%で, 3%は未償還の保証として積立金とされた), 債務者朝鮮政府の手取り170,000円(紙幣)は利払いの都合で1883年6月, 円銀120,500円に換算すると協定された。この借款資金のうち50,000円は壬午事変の被害者扶助料に, 残りは日本からの器械購入などにあてられた。(大森とく子「日本の対朝鮮借款について」『日本植民地研究』第4号, 1991年)なお, 1883年に日本に派遣された朝鮮人留学生40数名(金玉均の肝煎りで大半が郷班・中人・常民であつて政府要人の子弟はいずれ約半数は陸軍戸山学校に入学し他の一半は各種の実業学校に入学)の留学費はこの横浜正金銀行借款より支出したものであろうとの推測がなされている。(田保橋前掲書, 918頁)つまり朝鮮政府は賠償金総額銀550,000円のうち9%を占めるにすぎない被害者扶助料すら自前で用意しえなかつたわけであるから, 残りの賠償金500,000円の完済は困難であつたろう。実際, この壬午賠償金500,000円のうち, 1882年度に50,000円, 1883年度に50,000円という分割払いがなされたあと, 日本政府は残額400,000円を無条件で寄贈することを決定し, これをうけて竹添公使は1884年11月1日に昌徳宮で国王に公式謁見し, 壬午賠償金中400,000円返還を陳奏し, また汽艇1隻・山砲2門・砲車付属具を贈与したのだった。(同上書, 924-925頁)新渡戸の英文では次のようになっている。The massacre of the resident Japanese by conservative Korean mobs, in July, 1882; the remittance of a large part of this sum out of sympathy for the struggling nation; the influx of Korean youths to Japan for education—all these find their exact parallels in the history of American-Japanese relations, as we shall subsequently see. (全集第13巻, 315-316頁)

日本がアメリカ的役割(アジアの或る国を最初に開国させた外国としてその後も影響力をもつ)をはたすものと期待されていたのか。要するに、日本と朝鮮との歴史的関係を概観して、日朝関係と比較可能なのは前近代ではイギリスとフランスの関係(いわば英仏関係視点)、近代開国過程ではアメリカと日本の関係(いわば日米関係視点)、とされている。なお、新渡戸の渡米後に起こった1884年12月の甲申政変(当時は京城事変)については、中国の対朝鮮宗主権が偽善的な主張と非難され、他方で、ソウルの騒乱から逃れんと現地日本人がアメリカ公使館に避難し、捕えられた日本人が朝鮮駐在アメリカ公使の力添えで釈放されたのは日米間の友情の現われと讃えられている。なおまた、われわれ日本人の文明の多くの要素は中国人と朝鮮人のおかげである、と評価している。ただし、その後の様々な制約の多くも彼らに負っている、と付け加えているから、功罪相なかばすると見なしていたのかもしれない。

2. 1900年代頃の朝鮮観

新渡戸の邦文主著『農業本論』の初版は1898年の刊行だが、1908年刊行の増訂版で朝鮮の事が、例えば「古の邦語と韓語との研究は近来頻になさるゝ所にして、村も亦韓語に出づと説き、其原義を探るもの多し。」⁸⁾と書き加えられている。古代日韓比較言語研究の成果から、古代日本語の「むら」(後世に「村」となる)は古代韓語の「牟羅」(太古朝鮮の民族が各小群団を成す漂泊民だった頃に各群団を某牟羅と呼んで集団の義だったが、土着するに至り、牟羅なる語は集団の義から変じて定住地である村落の

義となり、後代には牟羅なる韓語から邑なる韓語に転じたという)に由来することなどが紹介されている。言葉の原義を重んじた新渡戸⁹⁾は日本語のルーツとの関連でも古代朝鮮に関心を寄せていたのであろう。

ところで、本書の初版と増訂版の間の約10年間に新渡戸の時代認識に変化があり、新しい時代認識が増訂版に反映している。帝国主義である。農業本論とは一見場違いのような概念であるが、増訂版に書き加えられる理由が時代の実体にもみならず、新渡戸のその間の経歴のなかにあった。増訂版への序文に相当する1908年3月付の「改版に就きて」(これは一高校長兼東京帝国大学農科大学教授のときに書かれている)には、「初めて本書を公刊してより、茲に十星霜を経」たが「爾来、行旅の間読書の時、此書に加ふべき資料に会する毎に、見聞の儘を随記したるもの亦尠からず。」¹⁰⁾とある。そこにいう「読書」には、次のような新渡戸の新たな経歴上必要性が増していったであろう帝国主義・植民地関係文献も含まれていたに違いない。すなわち、少年期よりずっと欧米の著作に親しんできた新渡戸ではあったが、台湾総督府に任官してからは台湾統治上要請された糖業奨励との関連から甘蔗栽培適地の熱帯植民地関係文献を渉猟する必要にせまられたし、そのご京都帝国大学法科大学の新設科目「植民政策」を開講するために関連文献を読むことになった。勢い欧米文献になったわけだが、それらにはImperialismという言葉が見いだされた。それに「帝国主義」の訳語をあて、例えば増訂版に「今日欧米の所謂帝国主義」¹¹⁾と書き加え、そして二つの意味における帝国主義という趣旨のことを書いている。その箇所はいささか曖昧な叙述で、

8) 全集第2巻, 234頁。

9) 例えば、英文『武士道』(初版1900年, 第10版[増訂版]1905年, 研究社版[新版]1935年)において婦人論を展開した箇所、英語の妻 wife は織り手 weaver という、また娘 daughter は乳絞り女 *duhitar* (milkmaid) という共に家庭

的な仕事の役割分担を語源とし、そこから派生的に生じたものであると述べている。(全集第12巻, 初版1969年, 再版1984年, 108頁)

10) 全集第2巻, 11頁。

11) 同上書, 539頁。

厳密な理解に難があるけれども、どうやら軍事的帝国主義と経済的帝国主義の二つを意味しているらしく、前者は望ましくないが、商工業を中心とする経済の発達の結果として起こり人類の進歩になるものとして喜ばしい後者は膨張してよいと評価されている。さらに、帝国主義者に対して商工業のみ偏重するあまり農業を軽視することの誤謬を論している。

以上は私の解釈である。これとは別な解釈をする人もありえようから、今私が問題にしている新渡戸の叙述をその前後も含めて次に引用しておく。それは『農業本論』の最後の章にあたる第10章「農(業)の貴重なる所以」(初版では「農」となっていたが、増訂版では「農業」となっている)の最後の節にあたる「結論」のなかのほぼ後半部分である。要するに本書の終結部分なのである。対比のために、先に初版の末尾を引用する。

「要するに本篇の預かる所は農を主とし、他の學問藝術を客として立論するに在て他の學問藝術の農に及ぼす影響を論したるものにあらず、是れ蓋し農を私するものにあらずして條理の當に然るべき所以に由れるのみ。」(新渡戸稲造『農業本論』初版、裳華書房、1898年、453 - 454頁)

「[中略] 要するに、本篇の立論は、農を主として、他を客とするに在れば、他の學問藝術の農に及ぼす影響は寧ろ簡略せり。是れ蓋し農に私したるにあらずして、條理の當に然るべき所以に由れるのみ。」

今や我國は將に農本國を脱却し、商工業を以て經濟の國是となすの機運に近づかんとし、余も亦此現象を歓迎するの意あるは、本書を讀過せし諸子の夙に知悉せる所なるべし。是れ一見商工業を重んじ農を輕んずるが如くにして、農學者として其本分を盡さざる所有るが如しと雖、而も余は自ら之を以て農に不忠なるものと信ずる能はず、唯是れ農業よりも國家全軀の經濟發達の要あるを知り、農民よりも全國民の尊きを思ひ、農事よりも國事の重きを感じずるがために外ならず。余曾て巴里に遊びて歴史家の泰斗

Lavisse 先生より、古來農本國にして世界に踴躍せし邦家未だ是あらざるの教を受けしこと既に之を述べたり。英國の農學の泰斗 Caird 氏亦曰く「農のみを以て世界に勢權を張れるの國民なし」と。余も亦屢々諸國の歴史を繙き仔細に之を驗せしが、洵に先生の言の如く、農業のみによりて世に其勢力を占めたる國あるを見ず。何れの國と雖も、自ら其勢力を擴張して、他國又は他人種に及ぼし、ものは、所謂農本主義を脱して、商工業に力を致したる者にして、現に今日歐米の所謂帝國主義若しくは膨脹主義を唱ふるは、皆商工業發達の結果に外ならざるなり。余輩は固より或る意味に於ける帝國主義、即ち暴力を逞しうして、弱肉強食の醜を演ずるが如き殘忍酷烈なる主義は、決して之を望む者にあらずと雖も、苟くも國力の伸長にして、經濟發達の結果として起る以上は、その膨脹咎むべき所毫も無きのみならず、却りて人類進歩の一端として、寧ろ嘉すべきものあるを見るなり。而して此意味に於ける帝國主義の實行は、農本國に於ては決して望むべからざる所にして、主として商工業の力を藉らざるべからず。然らば則ち、商工業の必須缺くべからざるは、多言を要せずして自ら明かなる可し。

斯く論じ來らば、余輩は専ら商工業にのみ重きを措きて農を輕んずるが如しと雖も、余も亦た茲に帝國主義者、又は工本並に商本主義者に對して、呈したきの言なき能はず、農の必要なること即ち是れなり。蓋し、内に農の力を藉らずして、外に商工業によりてのみ勇飛せんとするは、恰も鳥が樹木岩石等の間に一定の巢を構ふことなくして、渺茫たる海洋をば唯其兩翼によりて飛翔するが如きのみ。時に其勢力を扶植すること、或はこれ有らん、然れども國として永續したることは、古來未だ其例を見ず。今試みに史實に徴するに、フイニシヤ、タイア、カルセーヂ其他中世に於ける市國(City State)の如き、何れも其盛榮久しからずして、永く歴史に其影を止めざること、猶ほ千里を翔る鳥の、大空に飛翔せる瞬間は、地上に其影を印して甚だ勢力あるが如しと雖も、一たび其去るに及んでや、忽ち跡を没して復見る可からざるが如きの觀なきを得ず。之に反し、農業のみによりて起れる國は、恰も地中に棲息せる動物の

如く、内部は甚だ強堅にして、其生存も亦永續すべしと雖、其能力たる決して外に出づる能はざるものなり。

之を要するに、農は萬年を壽く龜の如く、商工は千歳を祝ふ鶴に類す。即ち一は一定地にありて、堅く且つ永く守り、一は廣く且つ高く翔つて、其勢力を示すものなり。故に此兩者は相俟つて、始めて完全なる經濟の發達を見るべく、而して後、理想的國家の隆盛を來すべきなり。

春田うつ夏の苗とる朝より

秋の夕をまもる田の神 神舞歌]

〔『農業本論』増訂版、六盟館、1908年、679-682頁。文中のカタカナ表記の三つの地名につけられている2重傍線は除いた〕

初版と増訂版では、それぞれの終わり方がかくも違う。この終結部分だけでも後者で相当の加筆がなされていることになる。しかも、20世紀に入ってからの新渡戸の帝国主義観や農業観が表白されている重要な箇所となっている。あえて長く引用した理由を理解していただければよい。經濟の發達にもとづいて国力が伸張する結果として起こる國家の膨張、このような意味における經濟的な近代帝國主義を進歩的なものゆえ嘉慶と見なす新渡戸は、この近代帝國主義の実行のためにも、農本主義者ではさらさらなく、かといって単純な商工立國論者でもなく、いわば農本商工立國論者になっていた。自國農業を輕視する帝國主義者や商・工本位主義者を批判しているかぎりにおいて、新渡戸は帝國主義者ではないだろう。しいて解釈すれば、私の場合こうなるのである。

このような帝國主義認識があるから、日露戰爭後の植民地化過程にある韓国に対する經濟的帝國主義下の農業移民を新渡戸は渡韓して主張することにもなる¹²⁾。この渡韓は1906年10月のことで、その印象を英文で書いたエッセーに盛られているのは、中國大陸・朝鮮半島と島國日本の間の文化的架橋者になったこともある古代朝鮮人と、開國過程で近代化に立ち遅れてし

まい米日關係に比定しうのような日韓關係を築けなかった近代朝鮮人と、落差に対する落胆や悲哀ではなからうか¹³⁾。かつて『日米關係史』で据えられていたような日米關係視点が近代朝鮮で実を結ばなかった事実をまのあたりにしたわけである。それが現実であるなら、宗主權をもつことになった日本が膨張的國家にふさわしくあろうとすれば韓国に權力をふるうに人道的であれ、との希望を抱いていた。

3. 1910年代頃の朝鮮観

島國日本の至近の半島にある古代以来の交隣國は帝國主義下の保護國としての韓国になっていたが、事態は容赦なく進んだ。朝鮮半島から古代以来の主權國家が消滅するのである。韓国併合(1910年8月)のとき、新渡戸は一高校長兼東京帝國大學法科大学教授であった。朝鮮に対して、この二つのポストに即した対応を新渡戸はしていくことになる。1910年9月の一高入學式で新渡戸が韓国併合を取りあげた演説は膨張主義的基調に彩られていたこと、拙稿¹⁴⁾で紹介済みゆえ本稿では省略する。法科大学教授の方であるが、農科大学教授(1906年9月就任)から1909年12月¹⁵⁾に配置換えとなった。これにはいささかわけがある。農科大学では「拓殖政策」担当とされたが¹⁶⁾、形式のみで実際には講義をもたされなかった¹⁷⁾。なぜか。そもそも新渡戸の一高校長就任は牧野伸顯文部大臣の要請による。牧野がオーストリア公使のとき世話になったことのある新渡戸は断りきれず、東京帝

12) 13) 拙稿「新渡戸稲造について」『北大百年史編集ニュース』第9号(1979年)参照。

14) 拙稿「新渡戸稲造の植民地朝鮮観」同上誌、第11号(1980年)、拙稿「新渡戸稲造と朝鮮」『季刊三千里』第34号(1983年)、参照。

15) 『東京大学百年史』[部局史一](東京大学出版会、1986年)911頁。

16) 拙稿「植民学の成立」『北大百年史』[通説](ぎょうせい、1982年)所収、参照。

17) 拙稿「植民政策と新渡戸」『新渡戸稲造』(札幌市教育委員会、1985年)所収、参照。

国大学教授兼任ならとの条件をだした。そのため牧野文相が本邦最初の農学博士で評判高い『農業本論』の著者なら文句あるまいと、農科大学に教授会の意向を無視して強引に押し込んだことへの報復的な措置だったのである。

この冷遇を見かねて対抗措置をとるのが後藤新平で法科大学への人事異動を目論み、その手段が新渡戸の就任を見込む「殖民政策」講座新設のための寄付金を東京帝国大学に提供することで、これを辣腕家後藤はやり遂げ、法科大学に同講座が1909年5月に増設された¹⁸⁾。新渡戸に対する後藤の度重なる好意である。彼は新渡戸を余程気に入っていたに違いない。その才能と人柄に惚れ込んでいたようだ。新渡戸も後藤の期待にこたえていく。新渡戸は東京帝国大学法科大学「殖民政策」講座担当教授として第1回日米交換教授になる。

1911年から1912年にかけてアメリカの諸大学で講演した新渡戸はその成果を英文『日本国民』¹⁹⁾としてまとめた。新渡戸にとって帝国主義・植民地体制は自明の前提であった。自明の、というのは当然そうあるべきという意味ではなく、善悪の価値判断が入り込む余地のない法則的な時代の傾向と認識されていたからである。19世紀の圧倒的傾向で現に成長し続け抵抗し難い近代帝国主義だから、この仮想敵視する諸強国間の競争裡で堂々たる国土たらんとする日本は植民地を贅沢品ではなく必需品として有する。台湾統治で日本が初めて学びえた植民地経営術は、併合したばかりでKoreaから公式にはChosenと呼ぶようになった朝鮮に効果的に適用されるだろう。しかも民族的に近い朝鮮の方が同化は容易であろう。同化や日本化を強制するつもりはないが、植民地でも法にもとづく正義でやっていく。法治国家になる植民地は旧体制下より

進歩的になるはずだ。日本が植民地統治で成功しうる秘訣は法治主義を仁愛で緩和することである。そうすれば、堂々たる国土で民衆も幸福を享受できるだろう。このように新渡戸の時代認識や朝鮮観が開陳されている。

1919年12月ロンドンで新渡戸は“Japanese Colonization”²⁰⁾と題して講演した。同年3月に日本を出発していたから、三・一運動(当時は朝鮮万歳事件)とその弾圧のことは海外で聞き及んだにすぎなかったが、大戦後の民族自決の気運のなかで国際連盟事務局次長に内定していたこともあって、朝鮮が気になっていたし、植民地の自治や独立が帝国イギリス・日本に共通する関心事であるとわかっていて。朝鮮をまず①ベルギーに、ついで②ウエールズに、最後に③アイルランドにたとえるという説明方法を用いている。①がドイツからの圧力を防ぐほど強くなることをイギリスは期待してきたはずで、①はそうなった。朝鮮は違った。その半島が地理的に暗喩するものは、かつては日本の口にミルクとハニーを注ぐ、日本海に突き出たピンだったが、近代では日本の心臓に向けられた剣の刃である。近代朝鮮の地政学的リスクを直截な比喩で指摘しようとしている。そして、併合もギブ・アンド・テイク的なものと合理化されているふしがある。また、将来、自治もしくは同化となれば②のごとく、独立となれば③のごとくか、と問いかけてもいる²¹⁾。

4. 1920～30年代頃の朝鮮観

古代以来の日本の文明化を促進した大陸文化

20) 講演ののち *Asian Review*, Sec. 4, vol. 16 (Jan. 1920) に掲載されていることをジョージ・大城氏が紹介し、全集第23巻(1987年)、所収。佐藤全弘訳「日本の植民」が全集第21巻(1986年)にある。

21) なお因みに、大城氏は日本がコリアの教師あるいは指導者であるというのが1910年代の新渡戸の考えだったとしている。(ジョージ・オオシロ「新渡戸稲造とコリア」『新渡戸稲造研究』第5号、1996年)

18) 前掲『東京大学百年史』[部局史一] 910 - 911頁。

19) Inazo Nitobe, *The Japanese Nation* (New York, 1912). 本書は全集第13巻、所収。佐藤全弘訳『日本国民』が全集第17巻(1985年)にある。

の伝播に朝鮮が演じた感謝すべき役割を、新渡戸は欧米に向けて強調し続けた。西洋文明の発達に果たしたクレタ島の役割に比定もしている²²⁾。大陸文化の導入・変容経路としての重要性には不動の確信があった。しかし、地政学的リスクが高まる近代に入ってから朝鮮に対する評価は依然として低く、陸(中国そしてロシア)・海(日本)からの猛威の間で翻弄される the decrepit nation「老衰国」²³⁾と表現されている。昭和期に入って明治以来の欧米型知識人の一典型が近代朝鮮史をどう見ていたかの例として、現代の歴史学が甲午農民戦争と評価しがちなのは異なり、進歩といかなる変化にも反対していたという意味で反動的な本質をもつ熱狂的な東学信徒集団の反乱と書いているなど、おそらく当時それが日本人の通念に近いものであったかもしれない。満洲事変が勃発し満洲勢力圏化の情勢のもと、新渡戸の朝鮮観に微妙な変化が起きる。満洲を外視視するようになる反作用として、朝鮮を準内地視し始める。朝鮮をスコットランドに比定するのがそれである²⁴⁾。そこに

は独立も、おそらく自治すらも展望されず、帝国本土に包摂されてしまい国家再建の道を断たれた朝鮮の未来像がスコットランドにたとえられて描かれようとしていた。現在の日本と朝鮮の間の政治的合併がイングランドとスコットランドの間のそれと似たようなものに発展してくだらうという予測を立てていたのである。朝鮮がスコットランドのようになればいいが、という希望的観測である。KoreanをChosenese²⁵⁾と綴り直すようになり、ChoseneseをScotchmenに対比する²⁶⁾新渡戸は同化について考える。日朝両民族の自然的(生体学的・解剖学的)要素に同化阻害要因はないが、人間の特に日本人側の文化的要因が同化を難しくする。日本人とりわけ下層階級に強い朝鮮人蔑視という民族差別観である²⁷⁾。日本の植民地政策に自信をのぞかせてきた新渡戸だったが、最晩年、満洲からの帰路、飛行機から鳥瞰して一望のもとに見渡せた美観とそれを損なう程の朝鮮貧農のあばらやとのコントラストに驚き哀れんで慨嘆していたのだ²⁸⁾。ヒューマニストの苦衷であろう。

22) Inazo Nitobe, *Japanese Traits and Foreign Influences* (London, 1929). 国際連盟事務局次長在任中(1920~26年)に日本紹介のために行なった講演や寄稿をまとめたもので、序文は1927年1月28日リビエラのカンヌで書かれている。本書は全集第14巻(初版1970年、再版1984年)所収。加藤英倫訳『日本人の特質と外来の影響』が全集第18巻(1985年)にある。

23) Inazo Nitobe, *Japan, Some Phases of her Problems and Development* (London, 1931). ジュネーブを去る前にロンドンの出版社から日本を代表する形で依頼があり約3年かけて執筆、その序文は柳条湖爆破事件(9月18日)の直前1931年9月1日付となっている。本書は全集第14巻、所収。佐藤全弘訳『日本—その問題と発展の諸局面』が全集第18巻にある。

24) 前掲拙稿「新渡戸稲造の植民地朝鮮観」、前掲拙稿「新渡戸稲造と朝鮮」参照。

25) Inazo Nitobe, "Abuse Hospitality," (June 8, 1930). 大阪毎日・東京日日新聞社の顧問となった新渡戸はその英字新聞に1930年6月1

日から主にEditorial Jottingsという名称を冠する「余録」として短文731篇を執筆した。その大半は全集第16巻(初版1969年、再版1985年)に収録、ごく一部が全集第23巻(1987年)に収録され、それらの佐藤全弘訳『編集余録』が全集第20巻にある。佐藤氏に「欲待の乱用」というタイトル訳を与えられたこれは全集第23巻、所収。次註以下の3篇もそれらの一つである。

26) Inazo Nitobe, "Chosen and Japan, Scotland and England," (July 9, 1933). この「朝鮮と日本、スコットランドとイングランド」は全集第16巻、所収。

27) Inazo Nitobe, "Assimilation of th Chosenese," (July 11, 1933). この「朝鮮人の同化」は全集第23巻、所収。

28) Inazo Nitobe, "Aerial Flight over Chosen," (August 11, 1933). この「航空機で朝鮮を飛び越える」は全集第16巻、所収。これは新渡戸が異国で現世を去る(10月16日)ほぼ2カ月前である。日本近代黎明期に東西両洋を旋回した大鷲のごとき生涯であった。